

皮膚科セミナー

2026 年 10 月 19 日

「第 76 回日本皮膚科学会中部支部学術大会 ①

大会を終えて」

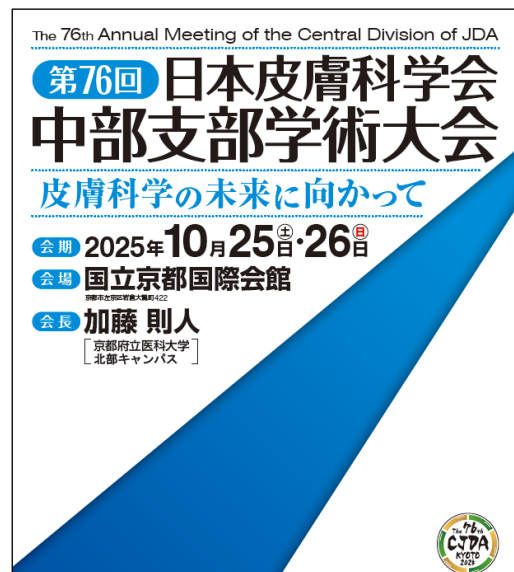
京都府立医科大学 北部キャンパス長
加藤 則人

はじめに

第 76 回日本皮膚科学会中部支部学術大会を、2025 年 10 月 25 日、26 日の 2 日間にわたって京都市の国立京都国際会館で開催しました。当教室での開催は、2007 年以来 18 年ぶりになります。いわゆる学会シーズンでの開催となり、国内外のいくつもの学会と日程が重なる中、中部支部だけでなく全国から多くの方々にご参加頂き、本当に有り難うございました。

テーマ

この学術大会のテーマを「皮膚科学の未来に向かって」にしました。近年、生命科学の研究は飛躍的な進展を遂げ、その研究成果をもとに皮膚科学も、私が皮膚科医になった 35 年前に望み描いた未来像をはるかに超えて、今日まで著しく進化してきました。一方で、当時限られた薬物療法しかない中で、一人ひとりの患者の皮疹の分布や性状のつぶさな観察や詳細な問診などから、皮疹が生じた理由、よくならない理由を深く考えた経験や、皮膚疾患の病態を理解しようと多くの論文を読む中で生じた疑問に答えを見いだそうと研究に没頭したことは、効果の高い薬物療法を行えるようになった今も大いに役立っていると思います。



診断できない皮膚疾患、うまく治療できない皮膚疾患は、今でも数多くあります。また、新たな課題も生じています。今後も皮膚科学が発展し続け、これらの皮膚疾患の診療や研究での課題を解決していくためには、社会や先輩たちから与えられたものに自らが経験したことや生み出したものを加えて、後輩や未来の社会に引き継いでいくことが必要と考えます。この学術大会がそのような機会の一つになることを願って、「皮膚科学の未来に向かって」をテーマとして、講演やシンポジウムなどを企画しました。

プログラム

大会のプログラムを振り返りたいと思います。特別講演は、私の皮膚科医としての歩みに大きな影響を与えてくださった二人のレジェンドに、自らの皮膚科医としての歩みに加えて“皮膚科学の未来に向かう若い皮膚科医へのメッセージ”を語って頂くようお願いしました。自己免疫性水疱症の未来を切り拓いた慶應義塾大学皮膚科の天谷雅行教授の特別講演は、天疱瘡の自己抗原の発見から新たな治療法の開発におよぶ長年の研究の成果に加えて、若い皮膚科医に向けて皮膚科学にとどまらず医学の未来を切り拓きグローバルに展開することの大切さを熱く語る、圧巻の内容でした。私の留学時代のボスであるドイツ・ボン大学皮膚科の Thomas Bieber 教授は、オーストラリアで開催中の International Symposium on Atopic Dermatitis での講演と重なったためビデオでの講演になりましたが、「Message for next generation of dermatologists 2025」というタイトルで、アトピー性皮膚炎の診療でのさまざまな課題を挙げたあとに、個別治療による治療の最適化など、それらの課題を解決するための未来への道筋を示していただきました。お二人の“若い皮膚科医へのメッセージ”には、還暦を過ぎた私も胸を打たれました。

私を含む平成元年（1989 年）卒業の皮膚科医 5 人によるシンポジウム「未来の皮膚科医へのメッセージ」では、川崎医科大学皮膚科の青山裕美先生から自己免疫性水疱症と皮膚バリア、信州大学皮膚科の奥山隆平先生から皮膚悪性腫瘍、川上皮膚科クリニックの川上民裕先生から血管炎、名古屋市立大学皮膚科の森田明理先生から乾癬、私からアトピー性皮膚炎と、それぞれの専門分野の臨床と研究に関する「これまでとこれから」について語り合いました。同期の皆さんの長年にわたる皮膚科学への熱い思いを改めて感じるとともに、それぞれの領域・地域で活躍する仲間たちとの旧交を温めたひとときでした。

京都大学皮膚科の梶島健治教授プロデュースのシンポジウム「生命科学の研究—未来に向かって」では、現在はオールアバウトサイエンスジャパン代表理事である西川伸一先生からは「生命誕生から ChatGPT : 38 億年目の創発」というタイトルで、JST 研究開発戦



略センターの辻真博先生からは「ライフサイエンス/医療イノベーションの潮流と展望」というタイトルで、京都大腎臓内科学の柳田素子先生からは「なぜ腎臓は治らないのか：修復不全の生物学」というタイトルで、これまでのご研究と未来への展望について、極めて示唆に富むご講演を頂きました。

地域医療の共通講習では、京都府健康福祉部長も務めておられた厚生労働省医政局研究開発政策課長の長谷川学先生から、「持続可能性を求められる地域医療と創薬研究開発の必要性—臨床現場への期待—」というタイトルで、前半は地域医療の現状と未来について、後半は日本で新しい治療薬を創って世界に発信していくために臨床医が果たす役割が重要であることなどをお話しいただきました。

医療安全の共通講習では、元大阪府保険医協会事務局次長で“なにわのトラブルバスター”とも呼ばれる尾内康彦様からは「「対面世界」から「非対面世界」に大きくシフトした患者トラブルの現況」というタイトルで、皮膚科医で弁護士としても活躍している田邊昇先生からは「医療訴訟負けない・起こされないコツと戦い方」というタイトルでお話いただき、多くの聴衆にとって大いに参考になる内容でした。

ミニシンポジウムでは、2024年4月にはじまった医師の働き方改革について、「医局の働き方改革—実際どう変わった？これからどうする？～現場のリアルを語る！医局長×若手×中堅ディスカッション～」というタイトルで、多様化する皮膚科医の働き方とこれからの課題に関するいくつかの大学における現状と対策について、情報を共有し、未来の皮膚科医がスキルアップとワークライフバランスを両立させていくことの重要性について、改めて考える機会になりました。

皮膚科医が関与することが多いアレルギー疾患である食物アレルギー、金属アレルギー、医薬品アレルギー、化粧品アレルギーに関する若手皮膚科医4名によるシンポジウムや8つの教育講演、ワークショップでは、それぞれの領域のエキスパートに最新の情報やスキルを披露していただきました。

最近、皮膚科の勉強をする機会が減っていることを自省していましたが、数多くの一般演題では若い皮膚科医の方々の発表から大いに学ばせていただきました。この学術大会を通じて、参加された皆様に多くの学びと未来に向けてのモチベーションが生まれたことを願っています。

お楽しみ

学術大会では、皮膚科学に関係することについての学びや気づきを得ることはもちろん重要ですが、コロナ・パンデミックの数年を経て感じるのは、学会の会場で共通する興味や目標、課題などについて参加者同士で語り合い、仲間や友人が増えることにも大きな価値があると思います。私にとっても、学会で知り合った国内外の仲間たちは人生の財産になっています。そこで、この大会の懇親会では、少しでも長く参加した方々同士で大いに「懇親」を深めていただくことを願って、会長の挨拶や乾杯の音頭などは敢えて「なし」

にしました。当日は、あいにくの雨天で会場の庭園に出ることはできませんでしたが、皆様が天橋立ワイナリーのワインを飲みながら歓談しておられる様子を拝見してうれしく思いました。余談ですが、当日は国際会館のスタッフが気を利かせてプロ野球・日本シリーズ第1戦のテレビ中継を懇親会場のモニターで見られるようにしてくださり、阪神タイガースを愛する仲間たちがモニター周囲に多数集まって熱い思いを語り合う、私にとって思いがけない幸せな時間を過ごすことができました。

大会のドリンクサービスのコーナーでは、京都府立医大にほど近い行列必至の「出町ふたば」の豆餅を始め、京都の和洋スイーツが好評でした。また、会場の国立京都国際会館は庭園の木の葉も色づき始めており、少しだけ秋の京都を楽しんでいたものだと思います。

最後になりますが、本学術大会にご参加・ご協力いただいたすべての方々に心から感謝申し上げます。



「皮膚科セミナー」

https://www.radionikkei.jp/maruho_hifuka/